

拓く

医師の意思疎通能力アップ

黒岩かをる氏
薫陶塾社長

インフォームド・コンセントの浸透などで、医療現場では関係者のコミュニケーション能力が課題になっている。「模擬患者」を使い講座を開く薫陶塾福岡市は、非常利組織(NPO)から株式会社化した異色の企業。黒岩かをる社長(56)は「市場の評価を受けサービスの質向上を目指す」と意気込む。

「えーっと……、痛いのどの歯ですか?」「奥歯です」「口腔(こうくう)内、いや……、口中を見せてください」

九州歯科大(北九州市小倉北区)で六月下旬、五年生九十人を対象に開いた講座。初診の中年女性という設定の模擬患者を相手に、学生三人が順番に問診をして。緊張して専門用語をつ

市場評価テコに質高める

患者に対する医師のコミュニケーション能力が問われるようになってからだ。半になつてからだ。

えつた

▽ ○ ▲

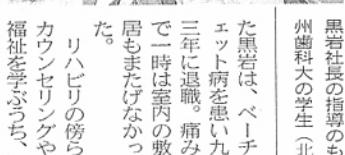
薫陶塾の業務は、模擬患者を使い問診や救急搬送など医療現場の様なシミュレーション学習の場を提供する。これまでに全国で四百例以上講座を開いてきたその母体は、黒岩が立ち上げた市民団体だ。

1948年福岡県生まれ。修猷館高校から津田塾大学に入学。自動車部に所属しラリーの出場経験も。模擬患者の研究会で「福岡SP研究会」を立ち上げて以降、良嶋大など九州各地の大学で非常勤講師も務める。趣味だった「勝ち負けにこだわるテニス」は病氣で断念。今の楽しみは、講義の終了後などに学生らとテーブルを囲み歓談すること。「年齢に学生らと関係ない自由な議論に刺激を受ける」という。

1994年4月、知人ら五人で模擬患者の研究会を立ち上げた。大学側の関心は高く、最初の一周年で開いた講座は二回。「法人化で公認の認証を受けた時には、年間五十回の講座を開くま

妙な表情で話す学生に、黒岩は「そうした気付きました」と笑顔に終り始めた。

「いかに医師側の論理」者への接し方を学ぶために生まれたのが模擬患者。日本で認知され始めたのは、本で治療過誤の問題などから、講座で模擬患者を演じたの



た黒岩は、ペーチエット病を患い、三年に退職。痛みで一時は室内の敷居もまたがなかつた。リハビリの傍らカウンセリングや福祉を学ぶうち、九七年、九州大の講座で模擬患者を演じたの進展を前にNPOの運営も始まり、規制も足かせになった。活動を広げ質を向上するには、企業としてのフットワークと、市場の厳しい評価を導入する必要がある。昨年十二月、自ら資金一千五百万円をねん出して株式会社に衣替えした。初めて売り上げ目標は「損益分岐点ぎりぎり」の千五百万円。年初に開いた東京事務所も、ようやく軌道に乗った。

最近、ある医師と話す機会があつた。問われて業務を説明すると「現場では患者の話を聞く余裕がない」との返事。黒岩は「患者を中心主義に変わらなければ、病院経営も成り立たなくな

黒岩社長の指導のもと、事座になって議論する九州歯科大の学生(北九州市小倉北区)

「病院経営、患者中心に変わらなければ」

(西部支社
木代俊一郎)
II敬称略